抜粋版

バスケットボールプラザ

Basketball Plaza *No:52*

2011年11月

NPO法人 日本バスケットボール振興会

molten®
For the real game

For the real game

「プレーヤーの技術や意志が100%発揮される時、スポーツは本物になる」
私たちモルテン・ブランドは、この信念をもとに
世界に類のないボールと
スポーツエキップメント・メーカーとして
つねに完璧な製品づくりを目指しています。

本大会唯一の公式試合球

BGL7
GL7 国際公認球 検定球
貼り・天然皮革、7号球

www.molten.co.jp

株式会社 モルテン 東京本社 〒130-0003 東京都墨田区横川5丁目5-7

目　　次

○　ＦＩＢＡアジア女子選手権大会・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・　2
　日本代表は３位に終わる

○　ＦＩＢＡアジア男子選手権大会・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・　5
　日本代表は７位にとどまる

○　アジア選手権大会を振り返って・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・　7

○　明治大学体育会籠球部の洋行・・・・・・・・・・・・・・・・歴史部・・・・　9
　1932 年 12 月～1933 年 3 月

○　東京・渋谷にバスケットボールストリート誕生・・・・・・・・・・・・・・・１４

○　JAL RABBITS　３０年間の歩み・・・・・・・・・・・・・・・中瀬達雄・・・１６
　頂点・皇后杯獲得を極めて、会社とともに沈む

○　会員だより
　畑龍雄先生のお墓と最近のバスケ随想と論考・・・・・・鹿子木基員・・２０
　バスケットボールとのかかわり・・・・・・・・・・・・・長生まり・・・２４

○　おめでとう「日本スポーツグランプリ」受賞・・・・・・・普及部・・・・２６
　北海道「在間　弘」氏(86 歳)との出逢いとつながり

○　１２月２１日はバスケットボールの日・・・・・・・・・・歴史部・・・・２８

○　ＪＢＬ2011～2012 シーズン日程 ・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・２９

○　ＷＪＢＬ2011～2012 シーズン日程 ・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・３３

○　ｂｊリーグ 2011～2012 シーズン日程・・・・・・・・・・・・・・・・・・・３６

○　第６３回全日本大学選手権大会組合せ・・・・・・・・・・・・・・・・・・・４５

○　事務局だより・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・４７

○　プラザ　こぼればなし・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・４８

ＦＩＢＡアジア女子選手権大会

日本代表は３位に終わる

［編集部］

８月２１日から２８日まで長崎県大村シーハットで開催された、第２４回ＦＩＢＡ女子アジア選手権大会兼ロンドンオリンピックアジア予選において、日本代表は奮闘及ばず３位の結果に終わり、アジア代表としてのオリンピック出場切符を手にすることはできなかった。

しかしながらアジア第３位ということで、来年開催されるオリンピック出場世界予選への出場権を勝ち取り、世界各大陸代表以外の出場切符５枚をかけて再びオリンピックへ向けて戦う。

今回の大会においては優勝した中国と第２位の韓国の力が均衡し、日本はそれにやや遅れをとった形となった。日本独特の速いバスケットはそれなりに有効であったが、身長の差は如何ともし難く、これからの大きな課題となった。

［予選ラウンド］

レベルＩグループ６チーム総当りで争った予選ラウンドで、日本はレバノン、チャイニーズタイペイ、インドには快勝したが、韓国と中国には完敗し予選ラウンド３位の成績であった。

また、韓国対中国戦は第二延長戦までもつれた結果、韓国が辛勝し予選ラウンド第１位となった。

順位	チーム	KOR	CHN	JPN	TPE	LIB	IND
1	韓　国		○99－93	○66－59	○69－67	○104-75	○83－47
2	中　国	●93－99		○76－53	○72－63	○79－58	○87－38
3	日　本	●59－66	●53－76		○81－54	○77－49	○79－51
4	ﾁｬｲﾆｰｽﾞﾀｲﾍﾟｲ	●67－69	●63－72	●54－81		○83－55	○81－53
5	レバノン	●75-104	●58－79	●49－77	●55－83		○71－52
6	インド	●47－83	●38－87	●51－79	●53－81	●52－71	

［決勝トーナメント］

日本は予選ラウンド３位で決勝トーナメントに入り準決勝で中国と対戦、決勝進出へ向けて頑張ったが中国の高さに抗しきれず１４点差で敗れ３位決定戦へ回った。

中　国　戦

チーム	１Ｐ	２Ｐ	３Ｐ	４Ｐ	合計	勝敗
日　本	8	13	21	20	62	●
中　国	21	17	22	16	76	○

第１ピリオド

日本は立ち上がり気迫こもったディフェンスから#13 大神がジャンプシュートを決めて先制するも、中国も#8 らを中心にすぐに入れ返す。しかしその後は中国に３連続得点を許し、そこからは中国ペースとなって日本は苦しい展開。悪い流れを断ち切ることができない日本に対し、中国は#11 が３Ｐシュートや高さを生かしたポストプレーで得点する。日本は１３点の差をつけられて終わる。

第２ピリオド
　中国の勢いを止めたい日本はディフェンスからプレッシャーをかけて相手のターンオーバーを誘う。そこから#13 大神がジャンプシュートを決め流れは日本へ傾くかに見えた。タイムアウト後の中国は苦しい体制からでもシュートをねじ込んで得点を重ね、結局前半を終わって中国に１７点のビハインドとなってしまった。
第３ピリオド
　日本は#6 間宮のシュートから３連続得点で反撃したが、中国も#15 を中心に得点しリードは変わらない。残り３分から交代して入った日本の#15 長岡が思い切ったプレーを見せ３Ｐを決めるも点差は縮まらず、４２対６０で終わる。
第４ピリオド
　日本はオールコートプレスで相手のミスを誘いじわじわと追い上げ、渡嘉敷、高田らの長身選手の頑張りで残り２分半に１１点差まで詰め寄ったが、その後中国に連続得点されてまた点差が開き結局６２対７６で敗れて決勝進出はならなかった。
＜ＢＯＸスコアから＞
　この中国戦、データ的にも相手が上回っており、日本の課題が見えた感じでもある。
まずシュート確率をみると２Ｐシュート成功率では、日本の平均 50%に対して中国は 58%、３Ｐでは日本 22%、中国 31%である。リバウンド数では日本の１６本に対して中国は３４本と倍以上となっており、中国の高さに対する対策とシュート確率をいかに上げるかが改めて課題となったと言えよう。

チャイニーズタイペイ　戦

チーム	１Ｐ	２Ｐ	３Ｐ	４Ｐ	合計	勝敗
日　本	28	27	12	16	83	○
ﾁｬｲﾆｰｽﾞﾀｲﾍﾟｲ	10	9	15	22	56	●

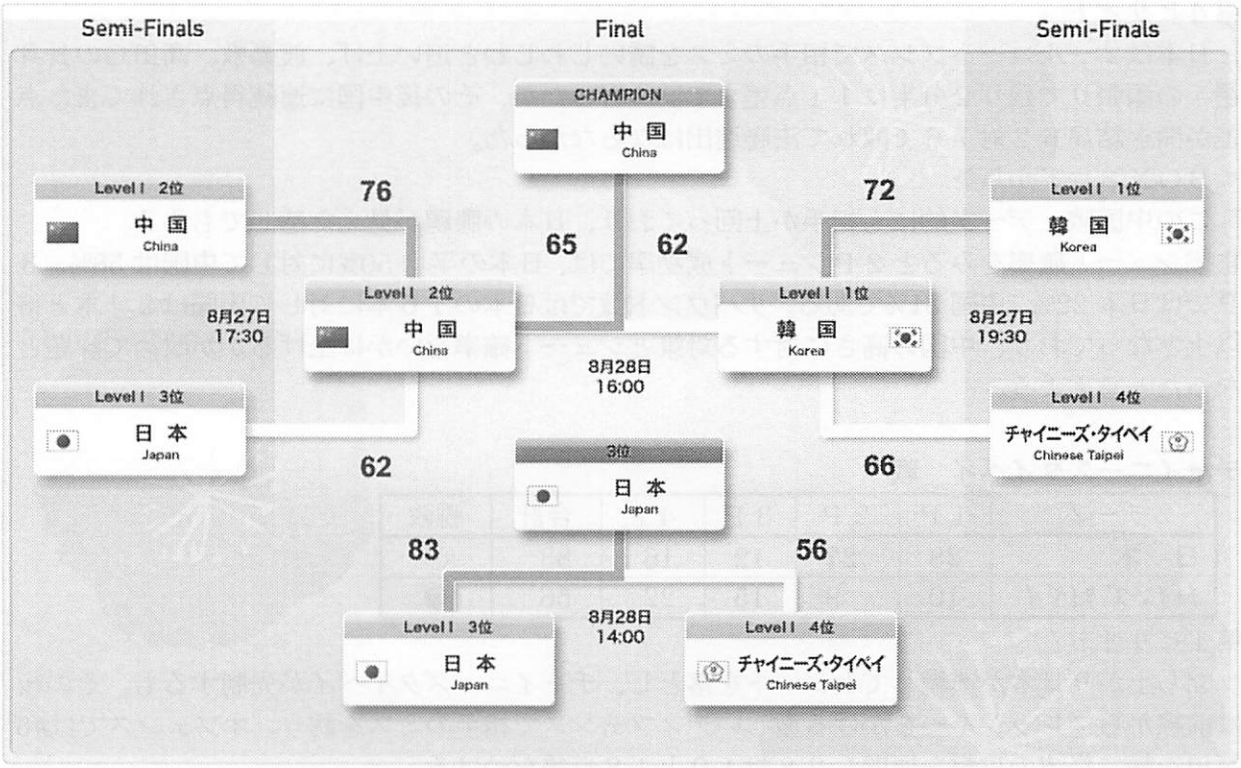
第１ピリオド
　立ち上がり日本が連続してシュートを落とし、チャイニーズタイペイが先制するも、その後は前線からプレッシャーをかける激しいディフェンスで相手のミスを誘う。オフェンスでは#5 高田を軸に怒涛の攻撃を展開し２８対１０と１８点差をつける。
第２ピリオド
　立ち上がり#6 間宮がオフェンスリバウンドをねじ込んでバスケットカウントをとると、#7 三谷の３Ｐ、#4 名木の１対１からの得点、#5 高田らのインサイドプレーが冴えて次々とシュートを沈めていく。相手は相も変らぬ日本のオールコートプレスに苦しんで攻め手を欠き、前半を終了して５５対１９と大差をつける。
第３ピリオド
　序盤チャイニーズタイペイは３Ｐシュート２本を含む３連続得点で点差を詰めるが、日本も#5 高田が果敢に切れ込んで得点すると、#12 吉田や#13 大神を基点に速攻を繰り出して得点を重ね６７対３４と３３点のリードをつけて終わる。
第４ピリオド
　チャイニーズタイペイはインサイドから攻めて得点するが、日本も#11 木村のスティールから#15 長岡がシュートを入れる。終盤チャイニーズタイペイは連続３Ｐシュートなどで反撃を見せるが得点の大差はどうにもならず、８３対５６で日本が勝利して第３位を確保する。この試合日本は、全員出場全員得点で快勝、来年６月に開催されるロンドンオリンピック世界最終予選の出場権を獲得、オリンピック出場への望みをつなげた。

＜ＢＯＸスコアから＞

この試合における日本の平均シュート確率は５２％、２Ｐシュートで５６％、３Ｐシュートでは３０％で、相手の平均シュート確率３８％をはるかに上回った。リバウンドでも攻守合わせて３０本と相手の２５本を上回っていて、データ的にも勝ちのパターンとなっている。国際ゲームでは、やはりシュートの確率とリバウンド数がものをいうことを示している。

［レベルＩ最終成績］

ロンドンオリンピックの出場権をかけた決勝戦は中国と韓国で争われ、以下のとおり中国が優勝し、２大会連続１１回目の優勝を飾った。２位の韓国と３位の日本には、ロンドンオリンピック世界最終予選の出場権が与えられた。



優　勝　中　国
準優勝　韓　国
第３位　日　本
第４位　チャイニーズタイペイ
第５位　レバノン
第６位　インド

［個人表彰］

大会終了後表彰式が行われ、日本は大神選手がベスト５に選出され、吉田選手がアシスト王に輝いた。

ＭＶＰ	ミャオ　リージェ	中国#8
ベスト５	ミャオ　リージェ	中国#8
	チェン　ナン	中国#15
	チョイ　ヨンナ	韓国#6
	シン　ヨンジャ	韓国#15
	大神　雄子	日本#13

ＦＩＢＡアジア男子選手権大会

日本男子代表は７位にとどまる

［編集部］

９月１５日から中国の武漢で開催された第２６回ＦＩＢＡアジア男子選手権大会兼ロンドンオリンピックアジア予選大会で、男子日本代表は予選１次ラウンドを全勝で勝ち抜く好成績で二次予選ラウンドへ進出した。二次予選ラウンドでは、アラブ首長国連邦には勝ったものの、フィリピンと中国に破れて３勝２敗となって、８チームで行われる決勝トーナメントへ進んだ。決勝トーナメントでは最初に対戦した韓国に敗退し、５～８位決定戦へ回ったが結果的に７位で終わり、ロンドンオリンピック出場の夢は消えた。

［男子代表チーム］

主なスタッフ

役　職	氏　名	所　　属
ヘッドコーチ	トーマス・ウィスマン	日本協会
アシスタントコーチ	東野　智弥	日本協会
アシスタントコーチ／通訳	東頭　俊典	日本協会
アシスタントコーチ／通訳	水野　宏太	リンク栃木ブレックス
マネージャー	石坂　雅彦	日本協会

選　手

No.	選手名	P	身長 cm	体重 kg	年齢 歳	所　　属
4	松井　啓十郎	ＳＧ	188	83	25	トヨタ自動車アルバルク
5	竹田　謙	ＳＧ	188	82	32	リンク栃木ブレックス
6	桜井　良太	ＳＦ	194	75	28	レバンガ北海道
7	石崎　巧	ＰＧ	188	85	27	日本協会
8	柏木　真介	ＰＧ	183	80	29	アイシンシーホース
9	川村　卓也	ＳＧ	193	80	25	リンク栃木ブレックス
１０	竹内　公輔	ＰＦ	206	98	26	トヨタ自動車アルバルク
１１	網野　友雄	ＳＦ	196	87	30	リンク栃木ブレックス
１２	広瀬　健太	ＳＦ	193	90	26	パナソニックトライアンズ
１３	正中　岳城	ＰＧ	180	78	26	トヨタ自動車アルバルク
１４	太田　敦也	Ｃ	206	110	27	浜松東三河フェニックス
１５	竹内　譲次	ＰＦ	206	98	26	日立サンロッカーズ

［予選１次ラウンド　グループＣ］

順位	チーム	ＪＰＮ	ＪＯＲ	ＳＹＲ	ＩＮＡ
1	日　本		○92－87	○77－55	○81－59
2	ヨルダン	●87－92		○71－58	○89－59
3	シリア	●55－77	●58－71		○74－61
4	インドネシア	●59－81	●59－89	●61－74	

大会初日、日本はインドネシアと対戦し全員出場全員得点で快勝したが、インドネシアは世界ランキング６６位のチームであり、日本は３３位なので勝ちは当然ともいえる。

２回戦目のヨルダン戦では第３ピリオドまでリードしていたが、第４ピリオドになって猛迫されて一時６点差まで詰められた。その後ヨルダンがファウルゲームを仕掛けたが良くフリースローを決めて逃げ切った。

３回戦目のシリア戦では相手に一度もリードされることなく、危なげない勝利。この結果予選Ｃグループ第１位で２次ラウンドへ進出。

［予選２次ラウンド　グループＦ］　グループＣで対戦している場合はその成績を適用

順位	チーム	ＣＨＩ	ＰＨＩ	ＪＰＮ	ＪＯＲ	ＳＹＲ	ＵＡＥ
1	中国		○75－60	○84－58	○93－60	○90－71	○75－60
2	フィリピン	●60－75		○83－76	○72－64	○75－52	○92－52
3	日本	●58－84	●76－83		○92－87	○77－55	○101-61
4	ヨルダン	●60－93	●64－72	●87－92		○71－58	○94－80
5	シリア	●71－90	●52－75	●55－77	●58－71		○80－73
6	ｱﾗﾌﾞ首長国連邦	●60－75	●52－92	●61-101	●80－94	●73－80	

日本代表は第２次ラウンドで最初に対戦したアラブ首長国連邦に１００点ゲームで快勝して、好スタートと思われたが、その次に対戦したフィリピンに敗れ、次に対戦した中国にも歯が立たず結局グループＦ、３位で決勝トーナメントへ進んだ。

［決勝トーナメント］

予選ラウンドＥグループとＦグループ各４チーム、合計８チームで行われた決勝トーナメントで、日本はまず韓国と対戦したが一度もリードを奪うことなく６７対８６で敗退し、５～８位決定戦へ回った。５～８位決定戦では最初に対戦したレバノンに１ゴール差で破れ、最後に対戦したチャイニーズ・タイペイに８１対７２で勝って７位に終わった。

ロンドンオリンピック出場をかけたこのアジア選手権大会は、結局中国が優勝しオリンピックの出場の切符を獲得した。

［最終順位］

優　勝	中　国	ロンドンオリンピック出場
準優勝	ヨルダン	オリンピック世界最終予選出場
第３位	韓　国	オリンピック世界最終予選出場
第４位	フィリピン	
第５位	イラン	
第６位	レバノン	
第７位	日　本	
第８位	チャイニーズ・タイペイ	

［顧みて］

期待された日本代表はオリンピックどころか、その世界最終予選にも出場できない結果に終わった。放映されたテレビで見た限りでは、中国と韓国に相当水をあけられている印象である。データ的に見てもシュート確率が全く低いし、リバウンドも取れていない。

男子について、このまま推移するとオリンピックへの出場権は遠い夢の世界という感じである。日本協会はこの状況を真摯に受け止めて、日本代表をいかに強化していくのかを根本的に検討し直す時期に来ているのではなかろうか。球技においてはオリンピックに出場しない限りメディアに取り上げられることが少なく、メジャー化は程遠い。現在人気沸騰のサッカーとて過去は厳しい道程を歩んできている。国際的に通用するチームを育てるにはいかにすべきか、バスケットボール界が一丸となって論議し、基本に立返って強化策を作成し直す必要があろう。

アジア選手権大会を振り返って

〔編集部〕

ロンドンオリンピックピック予選を兼ねたアジアバスケットボール選手権大会は、女子が８月２１日から、男子が９月１５日から開催され、女子３位・男子７位と当初の目標に達することができない残念な結果で終わった。決勝ラウンドでの上位チームとのゲームをテレビ観戦すると、日本代表チームは、10ｃｍから20ｃｍという身長差をハンデとしたうえ、同等のスキルを持つ大型プレーヤーと競う対策がかなり不足しているようにうかがえる。ゴール下ペイントエリア付近では長い手でシュートボールが容易にブロックされている。その手を避けてシュートすると共にファウルを貰うというセオリーも相手の体格に完全に負けているのが現状である。

日本国内では全員長身者というチームがないので、最初のマークマンをかわした後、次の長身者マークマンに対応する技術が磨けない。外国に遠征しても、練習試合でしかないので、相手の手抜きとは云わないが無理したディフェンスはないと思われる。従って、オリンピック出場を目指すための厳しいディフェンスとなる戦いでの世界の長身者軍団には現状の日本代表では歯が立たない。ちなみに、中国対韓国戦は長身者のしつこいディフェンスで完全なノーマークとなるチャンスが両チームともにつくれず、女子決勝は６５対６２、男子準決勝では５６対４３というロースコアとなっている。

国際的に見て日本代表チームは短身長だが、たとえ身長が低くてもスピードとシュート力があれば対抗できるといわれている。日本代表のスピード重視は身長差からをみると誤りではなかろう。しかし、先日のアジアバスケットボール選手権大会での日本代表の韓国戦、中国戦を見ると、日本代表はバックコートからフロントコートへの縦の動きによる速攻が主流で、サイドライン間の横のスピードが不足しているように感じられる。特に、セットオフェンスに入ったとき、外郭でボールが保持されている場合、ボールを持っていないプレーヤーの動きが少なく、ノーマークチャンスを個人プレーすなわち１対１のプレーで作ろうとしている。同等の俊敏さを有する長身者相手では完全なノーマークをつくることは非常に困難であることをゲーム観戦から知らされる。

セットオフェンスの開始から早い時期にノーマークプレーヤーをつくるためにはコート全面を使った縦横交えたスクリーンプレーなどの動きが必須であろう。早い時期にノーマークからの得点を意識すればワンゲーム当たり80点の得点は可能となろう。相手の強固なディフェンスを破るためには全員が縦横に走ってスクリーンし合い、ノーマークをつくるチームプレーが求められる。

是非、日本協会は、代表チームには長身者軍団の外国チームと国際試合を重ねて大型チームに対応できるように方策を図っていただきたいものである。

それにしても、練習時にはノーマークで90%のシュート成功率が欲しい。名シューターといわれる方々のお話から、代表選手には一日に400から600本のシュートを決める個人練習が必要と思う。全国から集められた代表候補選手には是非オールラウンダーを意識して正確なシューターに成長してほしいものである。特に外からの成功率が高いほど長身者を含めプレーヤーを外郭に誘い出せるのでゴール下での空きスペースが大きくなり、ペイントエリアでのオフェンスプレーが楽になる。

また、フリースローは、代表選手であれば80%程度を決められる実力は有しているが、試合では最初の２本が決められない選手が多い。一ゲームで２本しかチャンスがない場合、１本のみを決めたのでは成功率50%となってしまう。従って、最初の２本は確実に決めて欲しい。このような練習はメンタル面の強化が必要であろう。

アジア選手権大会でのゲームを振り返って見ると、女子代表の宿敵韓国戦では第1ピリオドで相手韓国のシュートが決まらず 20-06 と大幅にリードしたが、その後のピリオドでは 18-13-08 とジリ貧となったのに対し、韓国は 22-18-20 と安定したシュートで得点を重ねている。結果として 59-66 の 7 点差であった。シュートの成功率を見ると、2 点、3 点、フリースローそれぞれで韓国 45%、24%、84%に対し日本は 37%、18%、68%と全て下回っていた。フリースローで 19 本中 13 本の 68%が 100%であれば 1 点差まで詰めることができた。

中国戦では二戦ともフリースローは 80%以上の成功率であり、韓国戦での日本代表の不調が窺える。一方、大型選手の多い中国相手では身長差を克服できず、日本は 53-76 および 62-76 と二戦とも完敗であった。この中国戦で活躍した若手の長岡選手のプレーを韓国戦で見たかったものである。渡嘉敷選手と共に将来が楽しみな選手である。

また、大神選手と吉田選手のガード陣の活躍には拍手を贈る。しかし、大型長身者相手で無理なプレーもあった。好プレーはあったが、総じて味方の残る４人を生かして有効にプレーさせる場面が少なかったように思う。やはり相手チームの俊敏な大型長身者プレーヤーに体格負けしていたのであろうか。これを打破する今後の成長を期待したい。

男子代表は中国戦、韓国戦とも 10 点ほどの差をつけられた完敗である。チームの中心となる柏木選手と得点源である竹内譲次選手の故障が残念であった。男子代表も長身者の厳しいディフェンスにより 60 点前後と低得点であったのに対し、相手チームは 80 点以上の得点をものにしている。大型長身者チームを相手にするプレー対策が個人選手およびチームのいずれにも不十分であったと思える。女子以上に、大型選手をかわすプレーがみられなかった。従って低得点となるのは仕方無かろう。しかし、フリースローの成功率が、中国戦で 18 本中 12 本の 67%、韓国戦で 18 本中 10 本の 56%と言うのはいただけない数値である。フリースローはすくなくとも 80%の成功率が欲しいものである。

決勝トーナメント準決勝での中国対韓国戦では、双方の長身者が激しいディフェンスを見せて容易にはシュートを打たせず、56-43 の低スコアで勝負が決せられた。ちなみに、中国・韓国各々の２点成功率は 30%・38%、３点成功率は 15 本中 3 本で 20%、20 本中 1 本で 5%、と全般で低調な数値であった。フリースローは、中国が 25 本中 21 本で 84%、韓国が 15 本中 10 本で 67%であり、韓国の不調がうかがえる。

日本代表の大会結果は目標に達しなかったが、男子女子共に代表チームの全員がよく頑張ったと賞賛を贈りたい。しかし、プレーヤー個人が勝とうとして力みすぎており、プレーヤー同士で協力するチームプレーを念頭においていたであろうか。また、ノーマークチャンスが得られず、無理なシュートでリバウンドをとられ、失点に結び付いたようなプレーが無かっただろうか。代表チームの皆さんが次の大会を目指して大きく発展することを期待し、ここに提言する次第である。

選手全員がノーマークで得点できるシューターとなり、大型長身者相手に５人が協力してノーマークチャンスをつくり、確実に得点を重ねられるチームが完成するよう、選手のみならず指導される方々を含む関係の皆様に努力をお願いしたい。

明治大学体育会籠球部の洋行

1932年12月～1933年3月

［歴史部］

一昨年、日本大学ＯＢの増田貞博氏から「昭和の初め、明治大学籠球部にいた父親の貞造氏がアメリカに遠征した際の写真がある」との連絡をいただき、バスケットボールの貴重な資料として歴史部に送付していただいた。その際叔父の西脇秀夫氏もアメリカ遠征に同行しているので、関係先に記録が残っていれば調べてくださいとの依頼があった。（増田貞造氏は終戦直前に芦屋で爆死され、西脇秀夫氏は数年前に四日市市で他界されている）

調査の結果、昭和２年(1927)に早稲田大学のバスケットボール部がアメリカに遠征しており、その５年後の昭和７年(1932)に明治大学バスケットボール部もアメリカに遠征していることが判明した。「明治大学体育会バスケットボール部７０年史」（平成７年１０月２８日発行）には、「１９３２　アメリカ遠征の際バスケットボールの創始者ネイスミス氏にコーチを受ける」と記されており、その時の写真が掲載されているが、その内容についての記述はない。

以下、首題に関する内容を振興会歴史部で調査したので、その結果を紹介します。

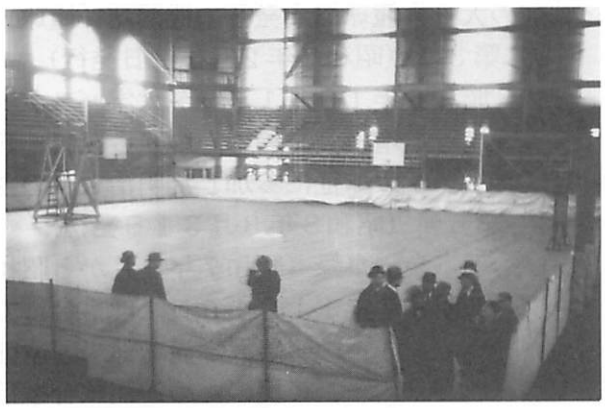
（１）「駿台新報」（現在の「明治大学新聞」）の記事

明治大学の資料室に保存されている「駿台新報」（大正１２年から昭和３０年頃まで発行、以降は「明治大学新聞」の名称になる）に「明治大学バスケットボール部アメリカ遠征」について以下の通りの関連記事がある。

①第３３１号（昭和７年(1932)１１月１９日（土）発行）

「籠球部渡米」米國西部を三十有余の試合

－新味を輸入し旧技を打破せんと－



行詰まった籠球界に新味を輸入し堅実な基礎を得んものと三年前から渡米を計画していたが、この程具体化し鈴木俊平氏を監督に鈴木東平氏を副監督として、１２月７日または１２月１１日出発の予定である。

西部地方の各大学と３０有余の試合を行うことになっているが、その大学はカリフォルニヤ、南加、シアトル市、ワシントン、ネバタ、スタンフォード、モンタナ等であり、４ヶ月の予定で明春３月下旬帰朝する。

米国遠征スケジュールは次の如し

米国遠征旅程

昭和７年(1932)

１２月７日～１７日　横浜港発、２８日頃沙市（シアトル）着

２９日～３０日　沙市ワシントン大学試合

昭和８年(1933)

１月２日　沙市クラブチーム試合、３日　沙市邦人チーム試合

７日　ブルマンへ出発、９日　州立ワシントン大学試合

１１日　ボゼマンへ出発、１６日～１８日　州立モンタナ大学試合

２月４日　中西部にてミシガン大学各大学試合を終えてニューヨークに向かう
２月５日　レノ到着、７日　ネバタ大学試合、１０日　桑港到着
１１日　桑港邦人チーム試合、１３日　スタンフォード大学試合
１５日～１６日　現地大学試合、１８日　加州クラブチーム試合
１９日　羅府到着、２０日　羅府南加大学試合
２３日　羅府アスレチックス試合、２８日　現地大学試合
３月２日　羅府邦人チーム試合、３日　ホリウッドアスレチックスチーム試合
４日　羅府発、２０日　横浜着

米国遠征選手氏名

教授未定、コーチ鈴木俊平（先輩）副コーチ鈴木東平、ﾏﾈｰｼﾞｬｰ未定、選手（主将）鈴木酉平（政大三）人見眞一（政大二）増田貞造（商大二）西脇秀夫（商大一）
西川喜代四郎（商Ｃ二ノ二）高倉正雄（商大一）近藤朝吉（一ノ三商Ｃ）吉岡太郎（二ノ二商Ｃ）筑紫猷門（二ノ二法Ｃ）松本大作（法大一）以上、
補欠井出敏（二ノ二法Ｃ）後藤秀雄（二ノ二法Ａ）藤谷佐（商大一）青池英治（二ノ二商Ｃ）増子勝一（二ノ一法）武田市郎（一ノ一Ｅ）

なお同部後援会主催に依る「映画と音楽の会」を昼夜二回日比谷公会堂において１２月４日催されることとなった。

②第３５３号（昭和８年６月１７日（土）発行）

「籠球部新人歓迎会」の見出しの中の記事で昭和８年入部の新人メンバーの氏名紹介と同時に「昨年米大陸に遠征し幾多の好成績を挙げ籠球の新味を獲得してきた本学籠球部は・・・」とアメリカ遠征の事実が報告されている。

（２）大日本籠球協会の機関誌「籠球」の記事

戦前の大日本籠球協会発行の機関誌「籠球」から関連記事を調べると、

① 第３輯（昭和７年２月１９日発行）

昭和６年１０月１７日～大学バスケットボール第一部リーグ戦の個人成績
Ｃ増田　Ｆ鈴木　ＣＦＧ西脇　ＦＣ高倉　Ｇ近藤　ＦＧ西川　ＧＦ人見

＊アメリカ遠征に参加した明治大学の主な選手は、リーグ戦の個人成績でも上位の選手

② 第６輯（昭和８年３月３１日発行）

理事会議事録（昭和７年４月から昭和８年１月）
昭和７年１１月１５日　理事会にて
一、明治大学籠球部米国遠征の件
一、後援のため送別試合挙行　明大遠征軍対五大学選抜軍

＊「明治大学のアメリカ遠征」が大日本籠球協会の理事会で承認議決され、送別試合を行っている。

③ 第７輯（昭和８年６月１８日発行）

「明治大学渡米軍と語る」
出席者　浅野延秋、李　想白、鈴木重武、阪　勘造、黒澤威夫
鈴木俊平、鈴木東平、増田貞造、人見眞一

＊帰国後、１９２７年（昭和２）にアメリカ遠征を行った早稲田大学のメンバーと今回アメリカ遠征を行ったメンバーとの対談

④ 第８輯（昭和８年１１月１１日発行）

「籠球米國行脚漫言一束」抜粋　　大島眞一（旧姓人見）

この様にして数ヶ月もまたたく間に過ぎ去り、アメリカのゲームはそのボールの動きが早いためボールを見る事さえ出来ないなど、ある人から云われ、我々にはとても手が出ないのではないかと恐れたこともありましたが、之も全く杞憂に終わり、スポーツに国境なしの嬉しさを泌々と感じ、何処にいっても非常に歓待され愉快な旅を続け、大いに収穫のあったこと事を感謝して居ります。

⑤ 第９輯（昭和９年３月１９日発行）

＊明治大学バスケットボール部の昭和８年(1933)シーズン（リーグ戦）について、増田貞造選手が主将としての気持を語っています。

１９３３年度（昭和８）リーグ戦も去る１２月４日で終了し、９月開始以来実に４ヶ月の長期に渉った事は私が入学以来初めての事であった。

明治大学は米国遠征を終わり今春帰朝し初のリーグ戦の事とて各方面より多大なる期待を以って迎えられましたが、然し其の結果は思い掛けぬ不成績に終わった事は主将として充分その責任を感じて居る次第です。（中略）

「敗軍の将、兵を語らず」と申しますから今此処に至って何も申し上げる事は有りませんが、唯明治が帰朝後其の秋のリーグ戦迄に歩んで来ました経路及び今後の覚悟を述べてこの稿の責任を逃れたいと思います。

今春明治は遠征を終わり帰朝後、長年の間の監督を失って以来、自治制に依りチームを統制し、今後の進むべき路を選手団に依り協議し、秋のリーグ戦に備えました。夏季、富士山麓の合宿では今迄に見ることの出来なかった程の新鮮味と意気を示しました。

そして其の採用すべきシステム・プレーは遠征の結果幾多の試合に依り体得した技術で在って、遠征選手を中心に留守軍選手を加えて一つの新しき型を造りあげました。吾々は之のシステム・プレーが今秋リーグ戦に異彩を放ち遠征土産として披露するに充分なるものである事を確信しました。然るにリーグ戦初頭以来ゲームに於いて威力を現さず、一寸敵を惑わすのみでチームが苦境に落ち入った場合之を救うには困難でありました。即ち一定の経路を辿れば決してゴールを決める事は出来なく、亦容易にゴール出来る場合も之を逸した等は、オフェンスに忠実ではあるが、基礎的練習の不足から来ている事を物語っています。

吾々が使用せんとしたシステム・プレーが全て米国で現在使用しているものであるが、然し米国の各チームが実際試合に使用する迄に数ヶ年の長期日と労力とを費やして作り上げたものである故に、之を吾々が１年足らずの練習で使うと言う事は少し虫が良すぎたのである。

其の上オフェンスが二段、三段と用意され、一方が不成功の場合直ちに第二段、第三段と之を変化させる事が出来た。斯の様に用意周到なもので在ったが、結局之も欲張った考えであった。

システム・プレーは其の基礎工事を充分にし之を完全に出来て初めて次に移る可きであって、余り先を急いでは何事も成功はむづかしい話である。

然し明治が斯く迄無理をしてもシステム・プレーを為さねばならなかったのは申す迄も無く、多少の無理は在っても現在米国で行っているシステム・プレーを示し遠征土産としたい希望に他ならない。

今秋リーグ戦の結果からして明治が採った方針が一歩先きに進み過ぎた憾が在った事は遺憾でありました。（中略）

終わりに明治が籠球界各方面のご期待に報ゆる事が出来なかったことを深く陳謝する次第です。

（3）「運動年鑑」（朝日新聞社発行）「明治大学のアメリカ遠征」についての記事

昭和９年(1934)「運動年鑑」（朝日新聞社・運動部発行）の中で李想白氏は、籠球界回顧「籠球界の一年を観る」の中で「明治大学のアメリカ遠征」について語っている。

> 明治大学の米国遠征はほぼ四割の勝率を土産にして帰ったといはれるが、その内容は必ずしも成功とのみいふことはできず、殊に帰朝後の競技成績が余り花花しくなかった点から一般の関心を集めるに至らなかった

（4）「早稲田大学アメリカ遠征」について

昭和２年(1927)早稲田大学のバスケットボール部のアメリカ遠征について「ＲＤＲ６０」と「ＲＤＲ８０」（早稲田大学バスケットボール部部史）に下記のように記述されている。

・「アメリカ遠征の壮途へ」（ＲＤＲ６０）

大学リーグ戦終了後、かねてから準備を進めてきたアメリカへ遠征して本場のバスケットボールを習得しようという計画が実現した。

三宅當時教授を団長とする一行１１人は、１２月１０日横浜港出帆の春洋丸に乗ってアメリカ遠征の壮途についた。外遊の極めて稀な時代に、学生達が自力でアメリカ遠遠征を行ったことは、センセーショナルな出来事として天下の耳目を集めた。

・「アメリカ遠征」（ＲＤＲ８０）

全日本選手権大会に優勝した頃から、部員達の中で技術向上のためにぜひアメリカに遠征したいという気運が盛り上がってきた。そしてアメリカ西海岸の日系新聞社、在ＹＭＣＡなど現地との交渉を李想白が、資金の調達は富田毅郎が分担し、各方面の協力を得て約３万円の資金を確保することが出来、アメリカ遠征が実現した。

昭和２年(1927)１２月１０日、三宅當時教授を団長とする一行１１名は、横浜港から日本郵船春洋丸に乗船しアメリカ遠征の途についた。

渡米第１戦は、１２月２９日オークランドにおいてカルフォルニア大学と行い、ついで西海岸各地の大学や邦人のクラブチームなどと２月７日まで２４試合を行った。

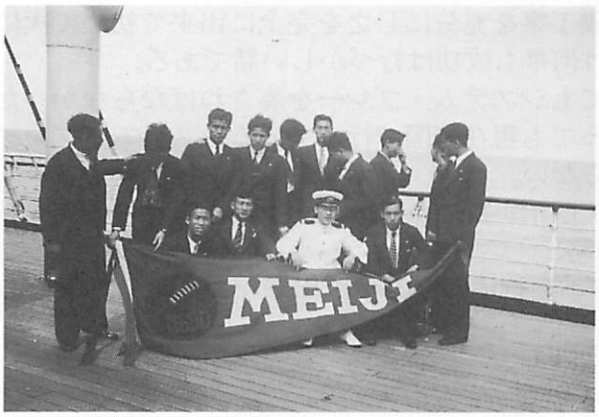
結果は１０勝１４敗で立派な体格と技術を持った大学チームには歯が立たなかったものの、人気は上々、技術的にも多くの収穫があった。

帰路は、シアトルよりアリューシャン列島を廻って２月２５日に横浜港に帰着した。

まさに画期的な２か月に及ぶ長期遠征であった。２月２６日の時事新報には「早大籠球部米国から帰る」という見出しで戦績や現地でのエピソードが大きく掲載された。

（5）最後に

アメリカン・メールライン社のプレジデント・タフト号（アメリカ大統領の名前）で昭和７年(1932)１２月７日、あるいは１１日に（当時、客船のアメリカまでの航路は１４日を要したので横浜より直行したのであれば１１日出発の可能性が高い）横浜より乗船、明治大学バスケットボール部は、約４ヶ月のアメリカ遠征に出発した。明治大学の野球部は、本場のベースボールの知識を吸収しようと既に２度（1924・1929）のアメリカ遠征を行っている。早稲田大



学は、昭和２年(1927)にアメリカ遠征を経験しており、バスケットボールのアメリカ遠征は、明治大学で２度目となる。この時代のバスケットボールの海外遠征として、大正１３年(1924)に立教大学の上海遠征、昭和６年(1931)に長崎医大、東京商大の上海遠征、東京府立第一高女アルモンドクラブ、京都大の朝鮮遠征などがある。

この時代、日本ではバスケットボール競技が全国に普及しつつあり、その活動チームの主体がＹＭＣＡのチームから大学のチームに移行する時代であった。

駿台新報に記述されている「行き詰まった籠球界に新味を輸入し堅実な基礎を得んと３年前から計画し・・」「新味を輸入し旧技を打破せんと」など多少勇ましい文言は、この時代の背景もあるであろうが、ＹＭＣＡのチームが主体であったバスケットボールの時代にアメリカ人からバスケットボール競技を学び習得し、さらに本場の新しいバスケットボールの知識を自分たちで直接吸収しようとの意気込みが感じられる。また前年のロスアンジェルス・オリンピック開催時にバスケットボールのオリンピック種目の採用が決まり、昭和１１年(1936)に開催されるベルリン・オリンピックでの実施が決定、日本チームも参加が予定されており、実力がいかほどのものか経験してみようとの思惑もあったのではないか。バスケットボール考案者のネイ・スミス博士やアメリカの一流の指導者などに会い、直接バスケットボールの指導を受けたことは日本の若い選手達にとって大いに気持ちが高揚したことであろう。

第１次世界大戦と第２次世界大戦の束の間の時代で、日本は、既に中国に派兵しており、アメリカでは、排日法が成立している国際的に難しい時代でもあったが、アメリカは、日本から来たバスケットボールの若者たちをあたたかく迎え、そのことは、選手達に青春の楽しい思い出としてこころに残ったと思われる。また当時の日本のバスケットボール関係者の期待感の大きさが「明治大学のアメリカ遠征・帰国後の昭和８年度関東大学リーグ戦の結果（第５位)」の評価と直接つながったのではないかと考えられる。

明治大学体育会バスケットボール部は、昭和７年(1932)１２月から翌年３月まで４ヶ月に亘り、アメリカに遠征、各地で試合を行い、その戦績は、１０勝３５敗（４２戦して１４勝の記述もある）であった。また、本場アメリカ・バスケットボールの最新の知識を吸収し、日本に持ち帰り実践しようと努力したことは事実である。

東京・渋谷にバスケットボールストリート誕生

［編集部］

東京・渋谷駅から代々木第二体育館へ向かう繁華街に「渋谷センター街」がある。平日の昼間でも多くの人々が行き交い、夕刻や休日はすれ違うのにも苦労するほどの賑やかさである。

このたびこのセンター街に「バスケットボールストリート」通称「バスケ通り」が誕生した。ゆえんは新聞でも紹介されたが、不良グループの横行などで悪くなった街のイメージを改善しようとする商店街が、街を明るく再生するにはどうしたらよいか？という試行錯誤の中からｂｊリーグの協力を得て実現したもの。

ＮＨＫテレビでよく放映される渋谷駅前交差点に面したセンター街入口には、写真のような横断幕と特大のボールが修飾されたアーケード形の門が設置され、バスケ通りと命名されたストリートの左右の街路灯にはバスケットボールストリートを強調する大きなバナーが何十本も飾られている。バスケットボールファンにとっては、この上ない興奮を感じさせる。

このバスケットボールストリート誕生のいきさつなどについて、渋谷センター商店街振興組合理事長の小野寿幸さんをパーラー西村総本店に訪ねて伺った。

小野さんご自身はバスケットボールの経験はないと云われるが、ｂｊリーグ秋田ノーザンハッピネスのヘッドコーチに転身した中村和雄氏とは３０年来のお付き合いという。

渋谷と云う街をイメージするとき、かつては“若者の街、ファッションの街、音楽の街、国際的な街、情報発信の街”など良いイメージでしたが、いつの間にか若者の街がバカ者の街になり、サッカーのワールドカップを機にフーリガンの街と化してテレビなどでも悪いイメージで映し出されるようになってしまいました。

渋谷区役所や警察とも相談し、商店街の自主的なパトロール隊による警備などを行って一時的にはクリーンな街になりましたが、またいつ同じような悪いイメージになるかわかりません。

そこで考えたのがスポーツをテーマにしたイメージアップでした。スポーツと云ってもいろいろな種目がありますのでどの種目にするか悩みました。相撲、バレー、サッカー、なでしこなど多くのネーミングを渋谷の街にあてはめてみましたが、どれも今ひとつスマートさに難がありました。そこで考えついたのがバスケットボールだったのです。長年の付き合いがある中村和雄さんに相談したところ、「バスケットしかないでしょう」と言われバスケットにしようと商店街の会議に諮ったところ、賛否両論噴出ですぐには決まりませんでした。

たまたまｂｊリーグのコミッショナー河内氏が私の大学の後輩だったこともあり、コンタクトしたところ、全面的に協力するとの答えをいただき具体化へ向けて前進する論議が始まったのです。バスケットということでみますとターゲットはやはり若者ですが、この若者が再びバカ者にならないかという危惧もありましたが、現在１歳くらいの人が１０年先１５年先にいわゆる若者になったときまでの期間を含めてターゲットにすればバスケットボールストリートが定着してうまく行くと云う結論に至ったのです。例えば田園都市線に二子玉川という地名があ

り現在相当発展していて通称「二子玉」（にこたま）と呼ばれていますが、これとて「二子玉」が浸透するのに２０年近くかかっています。

センター街には井の頭通りなど大小合わせて五つの通りがあり、そのうち四つの通りには、それぞれ固有の名前がつけられていますが、一番駅に近いメイン通りにはセンター街通りということで固有の名称がつけられておりません。そこでこのメイン通りをバスケットボールストリート、通称「バスケ通り」にしようということになりました。この名前を検討しているとき「何でバスケットボール」なのか？という反論も多岐に及びましたが、斬新性やスマートさといった点と、将来を見据えて街としてのイメージアップにつなげたいということでバスケットボールストリートとし、バスケ通りが誕生したわけです。

しかしながら名前は決まったものの世間にどうアピールしたらいいのか、具体的にどうすればよいのか迷っていたところ、ｂｊリーグの紹介で、ボールメーカーのスポルディング社社長の加藤さんから申し出があり、街路灯につけるバナーなどの修飾品を寄付しても良いとの連絡をいただきました。バナーなどは数量が多いため１００万円単位の経費がかかりますが、スポンサーがついたことで、経費的にも大変助かりました。

バスケットボールストリートの発表は、ちょうどｂｊリーグの開幕記者会見と一致したことから、ｂｊリーグさんの協力を得てその日に記者発表しました。

この発表に対してマスコミの反応も凄かったと思います。新聞、ラジオ、テレビの取材はもとより落語の世界でもバスケ通りが話題になるなど正直驚きました。しかしながらマスコミからも何でバスケットボールなのかという質問や、本当に将来のイメージアップにつながるのかと云う意見めいた言葉も聞こえ、ツイッターなどネット上の意見もこれまでの１０倍近くになっています。

マスコミの注目を浴びたことにより、全国各地から問い合わせや賛辞をいただいておりますし、１０月にはＮＨＫの国際部が取材のうえ全世界に２度もバスケットボールストリートを紹介してくれました。

この命名については批判も多いですが斬新さに対しては理解いただいていると思います。

日本のバスケットボールは国際的にみると低レベルであり、メジャースポーツとは言い難くそれゆえに何でバスケットボールなのかと云った批判もあるのであろう。しかし世界的にみればバスケットはメジャースポーツであり人気も高い。

これから日本のバスケットを強化して国際的レベルアップを図ると共に、イメージアップと斬新さを求めて命名いただいた渋谷センター街に対して、バスケットボール界があらゆる面から協力していくという姿勢も必要と感じられた。

渋谷センター街は代々木第二体育館にも近く、バスケットボールの健全な普及・振興・発展は、命名いただいた渋谷センター街のイメージアップにもつながるだろう。

振興会では、故壁谷理事から寄贈いただいた貴重品、マイケル・ジョーダンのサイン入りボールをイメージアップに役立ててもらうべく装飾用として提供している。

日本協会でもバスケット界発展のため「バスケ通り」の有効利用を是非検討して欲しいものである。

DUPER®

WE ARE A SPECIALIST IN BASKETBALL GOODS.

DUPER FIVE CO., LTD.
3-5,TATEKAWA 3-CHOME,SUMIDA-KU,TOKYO 130-0023 JAPAN
TEL.TOKYO 03(3632)7045 FAX.TOKYO03(3632)8327
URL:http//www.duper.co.jp E-mail:info@duper.co.jp

●2011ー2012デューパーNEWカタログをご希望の方は、住所、氏名、年齢、TEL、職業を明記し、切手390円を同封の上、上記住所までお申込み下さい。